

誓詞

一般に「ヒポクラテスの誓い」は、医師として全力を尽して患者の治療にあたる、患者に害を及ぼすことはしない、という医師の基本的な心得を示すものとして捉えられている。確かにそのような記述はあるが、前半部分には、師を敬うこと、医術を門外不出のものとするといった、当時の医術の徒弟制を反映する記載がある点は興味深い。また結石患者の治療は行わないという、一見して唐突なくだりがあり、この解釈については諸説あるが、当時の膀胱碎石術は致死率が高く、また生殖能力を失うことが多かったため、正当な医師は手出しすべきではないという主旨と思われる。

現在も、大学医学部などにはしばしばこの「誓い」が掲示されているが、このようにそのままでは現在の利用にはそぐわない面があることから、さまざまに意識、取捨選択されているのが普通である。世界医師会が1948年に定め、その後数回の改訂を経ている「ジュネーブ宣言」は、おのヒポクラテスの誓いを土台としている。

なお本文は、[1]の英訳をもとに和訳したものである。

医神アポロン、アスクレピオス、ヒュゲイア、パナケア、そしてすべての神々の御前に、自らの能力と判断によりて、以下の誓詞の履行をここに誓う。

医術の師を自らの両親と等しく扱い、師を日々の暮しでは同僚とし、師が金銭を必要とすれば分かち合い、師の家族を自らの同胞と考え、彼らが望めば無償、証紙なくして医術を伝える。自らの子息、師の子息子、宣誓した誓約書をもつ門下に限って教義、口述指導、その他全ての指導を行い、他にはこれを伝えない。

最大限の能力と判断を用いて患者に資する治療を行ない、患者に害や不正を行わない。乞われても毒物を供与、あるいはこれを助言することをしない。同じく女性に墮胎を導く器具を供与することもしない。自らの生活と医術を純粋かつ神聖なものとし、結石患者にはメスを加えることなく、これを専門の職人に委ねる。

いかなる患者を訪れる時も、患者を助け、意図的に不正、有害を為さず、男女を問わず、奴隷、自由人を問わず、その身体を冒瀆しない。職業上あるいは職業外の交際において見聞きしたことは、神聖な秘密として決して口外しない。

この誓詞を実行して背かなければ、自らの人生と医術に万人の評判を得るであろう。しかしこれに背けば、逆の報いを得るであろう。

1. Craik EM. The 'Hippocratic' corpus : content and context (Abingdon, Oxon. New York 2015)